

道博協ニュース

第48号

発行所 平成6年10月25日
北海道博物館協会
札幌市厚別区厚別町小野幌
北海道開拓記念館内
電話 011-898-0456
FAX 011-898-2657

第33回北海道博物館大会

盛会裡に終了

平成六年度の第三十三回北海道博物館大会および同総会は、新装なった旭川市大雪クリスタルホール（旭川市博物館）を会場に七月七・八日の

両日、総勢百五十名余りの道内博物館関係者を集めて開催されました。今年度の大会テーマは「生涯学習時代の博物館・園と職員」であり、会場となった旭川市大雪クリスタルホールは、平成五年九月に完成した新しい施設で、同館が目ざす新しい生涯学習時代の文化の殿堂にふさわしいテーマでした。

大会第一日目は、九時三十分から開会式が行われ旭川市教育委員会社会教育部佐藤智之次長の司会により進められました。

本年四月から新会長に就任した城戸崎彰会長（北海道開拓記念館長）から、主催者挨拶と四月以来の人事の更新に伴う経緯と新会長としての抱負が述べられました。

例年、東京の日本博物館協会から派遣されている毛利正夫専務理事は急用のため出席

できなかったり、あらたに日本博物館協会顧問に就任した渡邊左武郎前会長が、津輕義孝会長にかわって祝辞を述べられました。

続いて十時から、本年度の総会が開催され、旭川市教委佐藤俊一社教部長、松前町久保泰郷土資料館長の議長団により、予算、決算等の案件がスムーズに承認され、次年度大会開催地は、満場一致で松前町と決定しました。最後に、事務局提案による会則の改正については、種々検討の結果、後記の通り改正されました。

会場の参加会員から、北海道博物館協会の各年度ごとの基本方針や事業計画を見ると、旧態依然たるものがあり、生涯学習時代の新しい時代に即応した長期展望を考える時期にきているのではないかとの指摘があり、改善策検討への要望が出されました。事務局としては理事会等にはかり、次大会に一定の方向を示すというところで承されました。

平成六年度の北海道博物館協会表彰では、最初に、七年間にわたり、会長として、本会の発展につくされた渡邊左武郎前会長に、特別感謝状が満場の拍手のもとに手渡され、続いて一般表彰では、

一、美幌郷土史研究会（代表 伊豆田竜一）二、長川清悦氏（七飯町教育資料室）三、佐々木武氏（三笠市博物館協力会）

が表彰を受けました。午後の講演では、釧路市生涯学習推進部長である澤四郎氏が「生涯学習時代の博物館・園のあり方について」と題して、自からの釧路市博物館においての実践例をもとにいま博物館に求められているものは何か、時代に対応した博物館活動などについての感銘深い講演でした。

続いてこのシンポジウムは、中心テーマである「生涯学習時代の博物館・園と職員」について、司会者の斜里町立知床博物館の金盛典夫館長を中心に、室蘭市民俗資料館久末進一館長、旭川市旭山動物園小管正夫副園長、小樽市交通記念館準備室土屋周三主査学芸員、北海道立旭川美術館新明英仁学芸課長の五名により、それぞれの館・園の実例を踏

まえた報告がなされ、参加者を交えたディスカッションが行われました。最後に学芸職員部会アンケートの報告がなされました。今春来、学芸職員部会が中心となって行った道内博物館・園学芸職員の身分、職制、勤務内容等の調査の中間報告で、地徳力副部会長（穂別町立博物館学芸係長）からなされ、様々な問題点が浮き彫りにされました。

第一日の締めくくりである懇親会は、大雪クリスタルホール二階のレセプション室に会場を移して一日の労を和やかに慰めあいました。

第二日目の博物館・美術館等施設の見学は、旭川市役所前に午前九時に集まり、旭川兵村記念館、旭川市彫刻美術館、井上靖記念館、道立旭川美術館、優良良織工芸館、雪の美術館等を見学し、JR旭川駅に着いたのは、午後一時を過ぎた頃でした。

二日間の全日程を誠意と和やかな笑顔で支えてくれた旭川市博物館を始めとする市内博物館・園の皆様、本当にありがとうございました。

（事務局長 野村 崇）

（事務局長 野村 崇）

（事務局長 野村 崇）

（事務局長 野村 崇）

（事務局長 野村 崇）

（事務局長 野村 崇）

（事務局長 野村 崇）

（事務局長 野村 崇）

（事務局長 野村 崇）

（事務局長 野村 崇）

（事務局長 野村 崇）

（事務局長 野村 崇）

（事務局長 野村 崇）

（事務局長 野村 崇）

（事務局長 野村 崇）

北海道博物館協会会長に就任して

城戸崎 彰

本年三月、渡邊左武郎北海道
道開拓記念館館長がご勇退に
なられ、私が四月から館長に
就任いたしました。そして同
時に北海道博物館協会の会長
も、協会の会則により渡邊会
長より引き継ぐことになりま
した。幸い渡邊前館長は北海
道博物館協会の顧問に就任さ
れましたので、今後とも御指
導賜りますようお願いいたし
ます。

私は博物館の仕事は初めて
であり、まことに微力であり
ますが当協会の発展に努力い
たしたいとお願いいたしており
ます。よろしくお願いします。



去る七月七、八日旭川市に

おいて第三十三回北海道博物
館大会並びに北海道博物館協
会総会に出席し、協会の発展
のために積極的な御意見をお
聴かせ下さいまして、大変勉
強になりました。

申し上げますまでもなく、当
協会は北海道の博物館・園相
互の連絡提携をはかり、振興・
発展に努めることを基本方針
としています。私はまず、こ
の方針を達成するための環境
づくりを努めて参りたいと存
じます。

この環境づくりの一つとし
て、北海道においては「北海
道博物館等施設ネ

ットワークづくり
事業」を進めて参
りました。

北海道開拓記念
館が主催し北海道
博物館協会の協力
により、平成二年
度から五か年計画

でこのネットワークづくり事
業として全道博物館・園館長
等会議、博物館交流推進会議
の開催、収蔵資料報告書の作
成等を行い、全道の博物館等
の交流をはかっております。

また北海道開拓記念館では、
平成四年度よりコンピュータ
による情報システムの導入を
はかるための調査検討を進め
ております。そして将来これ
を全道に拡大し、情報ネット
ワークとして整備活用される
ことを期待しております。

これによって、各博物館等
の資料を相互に活用し合い、
調査研究の推進や常設展の充
実、そして特別展の相互開催
等によりその活性化がはから
れ、生涯学習のための有力な
施設として道民の要望に応え
てゆけることと思っております。

北海道開拓記念館が進めよ
うとしている全道の情報ネッ
トワークづくり事業に、北海
道博物館協会としてどのよう
に対応するのがよいのか、さ
らに検討したいと思ってお
ります。

なお、「北の歴史・文化交流
研究事業」における道内博物
館学芸員の共同調査・研究等
も、今後検討して参りたいと
存じます。

今回は開拓記念館の側から
みた環境づくりについて述べ
ましたが、今後会員の皆様の
積極的な御提言をいただき、
協会の基本方針の達成に努め
て参ります。各博物館・園等
の一層の御発展を祈念いたし
まして北海道博物館協会会長
就任の御挨拶とさせていただきます。

「NORTHERN
OWLS」六号の紹介

北海道博物館協会傘下の専
門職員部会の一つの「北海道
美術館学芸員協議会」(事務
局、札幌市中央区北一条西十
七丁目、道立近代美術館内)

から、標題の会誌六号が事務
局に寄贈された。A4版一二
頁(一九九四年七月刊)以下、
内容を紹介します。
談論・工藤欣弥「学芸員不
在の開館」平成五年度総会・
研究会抄録 講話・観玉堂代

表丸山高志「日本語の修復に
ついて」抄録・井上みどり「札幌
彫刻美術館における教育活
動」浅川真紀「イギリスの美
術館教育活動」日頃の問題
点等」新会員の館紹介 河野

敏昭「滝川市美術自然史館」
大田道子「北網圏北見文化セ
ンター」研究ノート 穂積
利明「石川啄木と書の世界展」
の展示について・羽生七重
「地元調査の重要さ―埋もれ
た美術家の掘り起こしの意義
研究ノート 村山史歩「ハイ
ビジョンの有効活用―釧路市
生涯学習センターの場合」北
海道美術館学芸員研究協議会
会員名簿・規約等が収録され
ている。入会希望者は、北海
道近代美術館01-644-16
八八一 鈴木正實氏宛連絡さ
れたい。

会則の改正
今総会において、第6議案
として会則の改正が決議され
ました。第18条第2項に

2、会員が会費を2年間納
入しなかつた場合、退会
したものとみなす。
という項が加わったことを
お伝え申し上げます。

博物館展示資料の盗難事件

— 地域博物館の苦悩 —

斜里町立知床博物館長 金 盛典 夫

今年七月から八月にかけて道内博物館から展示資料が相次いで盗難に遭うという事件が発生した。

ほとんどがアイヌ民族資料で、これらが集中的に狙われたようである。しかも、手口は非常に巧妙で盗まれたことがわからないように細工をしている。プロの腕をもってすれば普通の錠など無いに等しいという。盗難に遭った資料の内容と手口から見ても単なる出来心でないことは明らかだ。

しかし、多くの博物館がアイヌ民族資料に限らず、よほどの貴重品でない限り露出展示をしている現状では、プロでなくても品物を選ばずに盗もうとすればそれほど難しいことではない。

このことは他人に指摘されるまでもなく、博物館職員が一番知っていることなのである。当館も収蔵庫と展示室の

区別がつかないような展示方法をとっているからなおさらのことである。

では、なぜ盗難の危険を知りながら「放置」しておいたか。

理由は三つある。一つは予算上、盗難に耐え得る展示ケースが用意できないという消極的な理由である。もちろん展示ケースだけでなくスペースの問題も含めてである。

二つには、展示ケースの中に収納するよりも、露出展示の方が見学者にとって観覧しやすいという積極的な理由である。出来れば手にとって触れ、足に当てて感触を得ることの方が実感として展示資料を理解しやすいことははっきりしている。しかし、さすがにどこの博物館も体験学習のための資料以外は、手に触れて良いとはいっていない。当然持出されたり、破損しては

大変だから、せいぜい控えめに「展示資料には手を触れないでください」とお願いするぐらいのものである。

三つめには盗難予防のための簡便な方法として監視カメラの設置があるが、これもほとんどの博物館では利用されていない。

曲がりなりにも博物館は教育機関として位置づけがされているはずだし、地域の子供たちも大勢利用している。監視カメラを設置することはどの博物館もためらいを感じるか、あるいは「置くべきでない」という考えからである。

解説員を兼ねた監視員をおくことも方法だが、小規模博物館では予算と人材確保が大きな壁になっているはずである。博物館側からすれば望ましい盗難予防方法を熱望しながらもほとんどあきらめなければならぬ現状下にある。そのような中で盗難事件が発生した。

利用者側からの見方はどうか。

九月三日付け朝日新聞の見

出しは「開かれた施設」あだに嚴重な監視求める声も。また、同日付け北海道新聞は「ずさんな管理にも問題」とある。結果としての「あだ」はともかく「嚴重な監視」には名案がない。「ずさんな管理」ということには感情的に反発を覚えるが、展示手法に対してではなく、一般的な資料管理という点では確かに当たっている点がある。「どこにどんな資料を配置していたか」、「何点展示していたか」という非常に単純な質問に対して即座に答えられる学芸員がどれだけいたのだろうか。

恥ずかしながら私自身、今の展示になってから16年目になってもなお完全に掌握していなかった。むしろ、時間が経つほど記憶が不鮮明になっていたのである。朝日新聞の指摘にもあるように、特別展などで取り出した後、資料を戻していたかどうか、はつきりしない場合もある。

あるいは、盗難品が発見されたとき、間違いなく当館の所蔵資料であると主張できる

根拠(例えば写真・実測図を伴う台帳整備など)が全ての資料に対して保証されていたのだろうか。

本来、盗難とは関係なく、博物館資料として、調査研究のためにも最低限必要な事項であるにもかかわらず、遅々として作業は進んでいない。その意味では「ずさん」といわれてもやむを得ないかも知れない。

九月二十二日の道新に道立北方民族博物館で展示資料を盗もうとした高校生が逮捕されたと報道されたが、一連の盗難事件とは別口のように思

える。連鎖反応が恐ろしい。遅ればせながら急ぎよ展示資料の写真を撮影し、定期的な巡回と照合をすることにした。しかし、これも結果の確認であって予防的意味合いはあまりあるとはいえない。これすら少ない職員のみで続けるには大変なことなのである。だが、今のところこれにかわる案はない。

憂うつな毎日はまだ続きそうである。

道博協旭川大会参加記

有島記念館 学芸員 山崎 英文

道博協大会に参加させていただいた感想を会場でのメモをもとに書かせていただきました。

まず、総会の後に行われた旭川市博物館の見学は、展示物の豊富さと共に展示方法が素晴らしく、とてもおもしろいものでした。なかでもハイテクを使った、見学者が参加できる展示が特によかったです。

私自身も小学生の時、小樽の青少年科学館で楽しく過ごした事を思い出しました。科学館に比べると、一般の博物館や文学館、美術館などはいまひとつ魅力に欠けるような気がしていましたが、それは見学者が参加できるかできないかの違いなのでしょう。

続いて行われた特別講演では、このような専門的な講演を聴いているいつも思うことを、この時も感じました。それは、各地で様々な苦勞し

ながら一生懸命仕事をしている人を見てみると、感動して私も勉強したくなってくるのです。しかし、講演が終わって地元に戻り山積みになってる業務量を目の前にすると、なぜかとたんにやる気がなくなってしまうのですが。

ところで、博物館は教育普及活動も大切ですが、やはりまずは展示がメインになるといいます。これは本当だと感じました。土器ひとつにしたところで、段ボール箱に詰まっただけの役

にも立ちそうにないがらくたに見えます。しかし、立派なケースに入ってパネルの説明がつき、ライトアップされると、なんだか素晴らしいものに見えてきます（実際に素晴らしいものなのですが）。

対して文学館での古文書などは、紙面に字しかありません。しかも昔の読めない字です。このような、展示物とし

て最も地味と思われる資料を生かす展示方法はないものではないでしょうか。

続いて、シンポジウムではスタッフの問題が話し合われましたが、その内容はとても参考になるものでした。

「学芸員は社会教育の花形」と言われているが現実はとても厳しい。公立の、特に地方自治体の学芸員は、財政削減そのほかのために特に厳しいものである。そこでは学芸員は全くいないか、いたとしても一人だけで、その一人が様々な役割を兼務している。学芸員が館長を兼務していたりすると、その穴を一般事務職が埋めなければならない。する

と実際には学芸員がいなくても同然である。役職としての責務がかかるので、現場の仕事が出来なくなるからだ。行政がメインで「博物館」とは看板だけ。入れ物さえあればよいという、いわば立派な物置。

そんなところが増えるのが「博物館王国」といわれる北海道の現状であろうか。しかし、メインの博物館といっても博物館はやはり教育施設である。その博物館としての本質を取り戻すしかない。

「博物館での自由学習といっても、それぞれの来館者の目的に沿って個別に対処出来る人がいないと自由学習は進歩しない。」

「学校教育と連携した教育普及活動では、生徒への一方的な説明におわってしまふ。生徒からの質問や意見を引き出すのは非常に難しい。」

「動物園も博物館。しかし動物園と博物館の違いがある。動物園は説明パネルを読む人はほとんどいない。博物館はみんな真剣。それは楽しいところは学ぶ必要が無く、学ぶ

ところは楽しいところではないという観念があるからだ。」

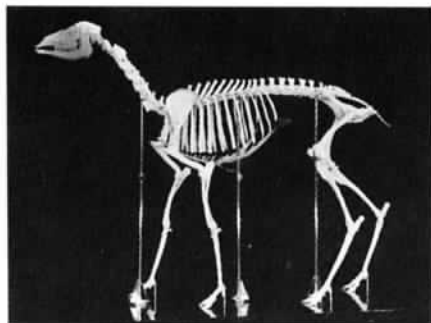
「少ない学芸員をどうするか。そのためには研修を充実させるしかない。」

「大学で学芸員の勉強をして卒業し、市町村の現場に入った時、後輩の新人学芸員をどれだけ養成出来るかが問題。」

それれうなずける貴重な意見だと思いました。最後は個人的な感想としては、以上のような一般的な意見もとてもありがたいものなのですが、できましたら具体的に直接役立つ仕事上のヒントやテクニック等も、あわせて指導していただきたいと思いました。また、余談ですが、講演中に語られた「無財七施（財力がなくてもできる七つの施し）」という釈迦の教えの話はとても素晴らしいものでした。博物館活動の最先端で活躍する方々の実践報告の他に、このような人間性にも触れることができ、たいへん実りある時間を過ごさせていただきました。感謝いたします。



「大学で学芸員の勉強をして卒業し、市町村の現場に入った時、後輩の新人学芸員をどれだけ養成出来るかが問題。」



筆者が所属する博物館では、「窓ガラスに鳥がぶつかりました」とか「道路に死んだ動物が落ちていました」などと言って、事故死した動物がしばしば届けられる。他の地域においても同じ様なことがあるだろう。はたして、これらの動物をうまく活用しているだろうか？予算がない、気持ち悪いし捨ててしまおうというところもあるだろう。剥製資料にしているところもあるかもしれない。いつ・どこで、誰によって採集されたのか、基本的なことが判っている資料は大変重要であり、自然史系の学芸員がいない地域でも是非収集していただきたい。

その場合、採集年月日・場所・採集者を明記したラベルを添付したい。可能であれば種名・性別や体長・体重などの計測値があればいうまでもない。これまで鳥類や哺乳類に関する資料は剥製資料（一部に毛皮資料）が中心であった。しかも展示目的で作成された本剥製は、標本剥製とは異なる

研究の発展に寄与することができる。近年は、DNAなどの遺伝学的な研究においても博物館等に所蔵されていた毛皮や骨格資料が重要な役割を果たすようになってきた。また、現生種の骨格資料は、古生物学や解剖学・考古学などの分野にとっても貴重な情報をもたらしてくれる。各地

「骨格標本をつくろう!!」
脊椎動物における骨格資料の重要性」
美幌博物館 学芸員 宇野裕之

り、後日計測することが困難である。しかし、脊椎動物の生態学・分類学・進化学上、最も必要とされる資料は、頭骨を中心とした骨格標本であり、また計測可能な標本剥製なのである。全身骨格などの資料が十分に蓄積されれば、各々の動物の成長に伴う変異や地理的な変異などに関する

の遺跡から出土する獣骨について、調査する基礎となる動物の全身骨格が、国内の博物館にどれくらいあるだろうか？この点、諸外国の博物館と比較すると、泣きたい思いになるのは筆者だけではない。これまでに、このアオサギの他にエゾシカ・エゾタヌキやミンクなどの全身骨格を作製してきた。また、全身はコス

トがかかるため、剥製と共に頭骨のみの資料を作るようにしている。予算がない場合、ネットなどに入れて土に埋めるなどの方法もある。その際には埋めた場所を忘れないように！

つい最近、骨格標本について書かれた素晴らしい著書が出版されたので以下に紹介したい。「自分で作るのはいやだ」という方でも参考になると思うので、是非博物館において一読していただきたい本である。

書名：骨格標本作製法
Methods of Preparing Osteal Specimens
著者：八谷 昇・大森司紀之
発行所：北海道大学図書刊行会
その他：一四六ページ、定価八、二四〇円

また、現生種の骨格資料は、古生物学や解剖学・考古学などの分野にとっても貴重な情報をもたらしてくれる。各地

「骨格標本作製法」
Methods of Preparing Osteal Specimens
八谷 昇・大森司紀之 著
B5変型・146頁 定価8240円(税別8000円)

北海道大学図書刊行会
Hokkaido University Press

北海道大学図書刊行会
Hokkaido University Press

開拓記念館 開拓の村 文化振興会の活動

専務理事 佐土根 脩

〔社団法人〕北海道開拓記念館・開拓の村文化振興会。

なんとも長つたらしいネーミング。私たち仲間です時は、「文化振興会」と略して使っています。法人化する時、該

当法人の目的及び実態を適切に表現した社会通念上も妥当なもの」という道の指導に従

つたためです。そのせいか、大切な郵便物がときどき事務局のある開拓記念館ではなく、

開拓の村の方へ配達されて慌てさせられます。

この名称は生い立ちに原因しているのです。昭和五十五年に北海道の歴史に関心のある人たちが集まって開拓記念館の活動に参加する「友の会」を設立、三年後にオープンした開拓の村のボランティアも組織に加え、「北海道開拓記念館・開拓の村友の会」と名乗るようになりました。

さらに結成十年目の平成三年三月末、道知事認可を得て法人化を実現、名称も私的な「友の会」から公益性ある「文化振興会」へ、合わせて二十二字の名称に変更したのです。

名称談義はこれくらいにして、会員の自発的参加を前提にしている団体では、会員数と財政的支えになる基金の二つの数字が組織の盛衰を語っています。

五月末現在の会員数は八百八十二名、四年前の法人移行当時の六百六十四名と比べて二百十八名、率にして三三〇増えています。毎年七十名前後の増加で、当面の目標である一千名会員の実現が視野に入ってきたと自信を深くしています。

基金の方も、おかげさまで順調な伸びを示しています。法人化を申請した時、千二百万円の基金造成がやっとでしたが、この春の総会で二倍ア

ップの二千四百三十万円に達しました。正会員（年会費は三千元）から終身会員（会費五万円）終身維持会員（一口二十万円以上）への加入勧誘を積極的に進めた成果といえましよう。

全国に数ある公立博物館のすべてに友の会があるわけはありません。まして法人格を持つているところはほとんどないそうです。当然ながら、「法人化によるメリットは何か」とよく聞かれます。

文化振興会の順調な伸びと直接結び付くわけではないのですが、友の会時代の博物館主導型から文化振興会主導型へと大きく転換したことだけは事実です。言うなれば、育ての親からの乳離れです。

主な事業の「研修旅行」「会報発行」「協力事業」については、友の会時代から通巻で二九号になります。かつては記念館の主任学芸員に編集をやってもらい、記事の多くも学芸員諸君の手を煩わせていました。今は編集長をはじめ執筆者の大半が会員となり、「会

員のための会員による会報」の色彩を強めています。対外協力事業に関しても違つた面が現れています。昨年夏、開拓記念館を会場に「イヌイト・アート」展がカナダ・ノースウエスト準州の主催で開かれました。私たちは共催の形でこれに参加し、会期中の発券業務や会場管理、関連民芸品の販売などを引き受けました。今秋も開拓記念館で「アイヌ文様」展が開催されます。これにも積極的に協力することになると思っています。

最後にもう一つ付け加えなければなりません。会の事業活動全体を縁の下で支えているミュージアムショップの存在です。記念館や開拓の村への来観者に「ショッピングの楽しみ」を提供するとともに、主として会費収入と基金の利息収入で賄っている財政をいろいろな形でサポートしています。会費収入、基金と並んで、文化振興会を支える三本目の柱になっているのです。

定から資料づくり、「足」や「宿」、訪問先との打ち合わせに至るまで、ほとんど開拓記念館の学芸員の皆さんのお世話になっていました。まさに「おんぶにだっこ」だったのです。

現在は担当理事数名の会議制で、日頃接触している会員からの要望を入れてプランづくりし、資料づくりの方も手の込んだものにするなど自賄いでやっています。昨秋から四十名の参加募集定員（大型バス一台分）が二、三日で一杯になり、大勢のキャンセル待ちが出るありさま。大型バスを二台にして対応しています。

春と秋の年二回発行の会報「とどまつ」の編集も、会員中心に変わってきています。今春発行の「とどまつ」六号は、友の会時代から通巻で二九号になります。かつては記念館の主任学芸員に編集をやってもらい、記事の多くも学芸員諸君の手を煩わせていました。今は編集長をはじめ執筆者の大半が会員となり、「会

員のための会員による会報」の色彩を強めています。対外協力事業に関しても違つた面が現れています。昨年夏、開拓記念館を会場に「イヌイト・アート」展がカナダ・ノースウエスト準州の主催で開かれました。私たちは共催の形でこれに参加し、会期中の発券業務や会場管理、関連民芸品の販売などを引き受けました。今秋も開拓記念館で「アイヌ文様」展が開催されます。これにも積極的に協力することになると思っています。

最後にもう一つ付け加えなければなりません。会の事業活動全体を縁の下で支えているミュージアムショップの存在です。記念館や開拓の村への来観者に「ショッピングの楽しみ」を提供するとともに、主として会費収入と基金の利息収入で賄っている財政をいろいろな形でサポートしています。会費収入、基金と並んで、文化振興会を支える三本目の柱になっているのです。

定から資料づくり、「足」や「宿」、訪問先との打ち合わせに至るまで、ほとんど開拓記念館の学芸員の皆さんのお世話になっていました。まさに「おんぶにだっこ」だったのです。

現在は担当理事数名の会議制で、日頃接触している会員からの要望を入れてプランづくりし、資料づくりの方も手の込んだものにするなど自賄いでやっています。昨秋から四十名の参加募集定員（大型バス一台分）が二、三日で一杯になり、大勢のキャンセル待ちが出るありさま。大型バスを二台にして対応しています。

春と秋の年二回発行の会報「とどまつ」の編集も、会員中心に変わってきています。今春発行の「とどまつ」六号は、友の会時代から通巻で二九号になります。かつては記念館の主任学芸員に編集をやってもらい、記事の多くも学芸員諸君の手を煩わせていました。今は編集長をはじめ執筆者の大半が会員となり、「会

館・園紹介

中原悌二郎記念
旭川市彫刻美術館

この美術館は、以前旭川郷土博物館に使われていた建物・旧旭川借行社（明治三十五年建築・国指定重要文化財）を改修して平成六年六月一日に彫刻の専門の美術館として開館しました。

旭川市では、日本の近代彫刻史に大きな足跡を残した中原悌二郎の作品の収集に努めると共に、昭和四十五年には、その偉大な業績を顕彰して中原悌二郎賞を創設しています。この賞も平成六年で二十五回

目を迎えております。彫刻美術館では、中原悌二郎をはじめ、旭川ゆかりの彫刻家および中原悌二郎賞の受賞作品など一四〇点ほどを収蔵し、展示しております。

この美術館の建物は重要文化財の指定を受けているので、改修にあたっては文化庁建造物課との協議を重ねた上で、建物のもっているすばらしさを出来る限り生かした形で美術館になるように、使用する材料や色彩等についても十分に注意をはらって改修および展示工事を行いました。また、体の不自由な方のために、新たにスロープ、椅子式階段昇降機を設置して、より多くの方々に観覧いただけるように努めました。



彫刻美術館で収蔵している彫刻家は五十六作家で、収蔵作品は彫刻が一四二点で、ほかに彫刻家の素描、版画を収蔵しております。彫刻は中原

悌二郎の全作品十二点をはじめ、荻原守衛、石井鶴三、堀進二など、悌二郎と同時代の作品、木内克、柳原義達、佐藤忠良、舟越保武、建畠覚造、向井良吉など、中原悌二郎賞の受賞作品、加藤顕清、本郷新、山内壮夫ら、旭川にゆかりのある作家の作品を収蔵しております。これらの作品群は、その充実した内容において日本でも有数のコレクションとして高い評価を受けております。

美術館の二階展示室では、中原悌二郎の作品を核に常設展示を行い、一階展示室は、特別展・企画展を開催しております。六月の開館から十月までは、二回に分けて「彫刻家の素描展」を行い、十一月からは平成五年・六年に新たに収蔵しました彫刻、素描、版画による「新収蔵品展」を開催いたします。平成七年につきましても、年数回の企画展を開催する予定で準備を進めております。

作品の展示以外にも、美術講演会、講座、彫刻散歩などの活動を行うことを通して、より多くの市民、来館者に彫刻のすばらしさを理解していただくために努めてまいりたいと考えております。

また、訪れた方々に憩いのときを過していただくと共に、所蔵作品図録や絵はがき等を提供するためのアートショップとヒーコーナーをもうけております。

六月一日開館以来、今日まで二二、〇〇〇名以上の観覧者を迎え、まずまずの出発かと思いますが、館の職員全体がはじめての仕事であり、先輩の各館のご指導をいただきながら、よりよい美術館になるよう努めてまいりたいと思

つております。
（旭川市彫刻美術館館長）
旭川市彫刻美術館案内
★開館時間
午前九時から午後五時まで
★休館日
月曜日（祝日の場合はその翌日）
年末年始
★観覧料
一般三〇〇円（二四〇円）
高校二〇〇円（一六〇円）
小中一〇〇円（無料）
*カッコン内は団体、二〇名以上
★交通のご案内
旭川電気軌道バス・旭川駅前発⑤番、一条通西武百貨店前発②番乗車、いずれも四区一条一丁目（彫刻美術館前）下車、所要時間は約二十五分
タクシー・旭川駅から約一五〇〇円、所要時間は約二十分
★お問い合わせ先
〒〇七〇 旭川市四区一〇一
☎〇一六六・五二一・〇〇三三
①〇一六六・五五・一四一三



館・園の主な事業計画

●道立北方民族博物館

11・8～10 「第九回北方民族文化シンポジウム」

11・12 「火おこし体験」

11・20 「サラニブを作ろう」

12・8 「博物館フォーラム」

(菊池徹夫・平川善祥他)

12・10 「あやとりは世界の遊び」

●網走市立郷土博物館

10・17～12・16 「網走周辺の縄文時代展」

●道立旭川美術館

10・22～11・27 「鳥山明の世界」

12・8～1・8 「北海道・今日の美術―飛躍する器たち」

11・26、12・3・10・17 「美術入門講座」

●道立帯広美術館

11・1～3・26 「中国六千年の秘宝」

11・1～3・26 「十勝の絵画―熱き表現者たち」

●道立近代美術館

10・7～12・11 「北風景追憶」

10・23～11・27 「北海道・今日の美術」

今日の美術

12・17～3・31 「ロマンティック・イマジネーション」

12・1～11 「25回道教職員美術館」

12・17～2・5 「美術の光／光の美術」

●札幌芸術の森

「美術館」10・22～12・18

「收藏品企画」

12・14～3・31 「收藏品展」

「工芸館」11・27～3・31

「冬のクラフト展」

●北海道開拓記念館

11・3～12・18 「北海道の食事」展

1・5～3・12 「教科書と子どもたち」

11・3 講演会「伊達一門の北海道移住」(伊達篤郎)

11・13 「北アジアにおける人類と文化の交流」(芹沢長介・矢島睿)

12・4 「野幌の森林・北海道の森林」石川幸男

●札幌市資料館

12・6～3・26 「道内最近同人雑誌展」

●旭川市博物館

11・3～12・4 「擦文文化の終焉」

の終焉

●恵庭市郷土資料館

11・12 「せんべい焼き」

●苫小牧市博物館

12・11 「しめ縄づくり」

●美幌農業館・美幌博物館

9・23～11・6 「ばれいしよ展」

●道立三岸好太郎美術館

10・14～11・30 「北方のモダン―三岸好太郎と札幌の画家たち」

●木田金次郎美術館

11・3～「木田金次郎」展

★平成六年度北海道博物館等施設ネットワーク事業「博物館活動交流推進会議の開催」

今年度の「博物館活動交流推進会議」(道開拓記念館主催道博協共催)が次の通り開かれます。

一、道北ブロック学芸員等会議、①十一月十日、②留萌市海のふもと館、③講演「記念館所蔵文書にみる近世の北海道」(小林真人氏)、「西蝦夷地と場所請負」(田島佳也氏)

二、道南ブロック学芸員等会議①十一月十七、十八日②江差町郷土資料館他⑤講演会

「北海道の植生」(五十嵐恒雄氏)

三、道東ブロック学芸員等会議①十一月二十一、二十二日②厚岸町海事記念館③講演会「国泰寺の経営について」(矢島睿氏) 他

四、全道ブロック館長会議

①十二月一、二日②苫小牧市博物館③講演会「博物館と考古学」(大塚初重氏) 他

問い合わせは、北海道開拓記念館文化交流課(〇一一一八九八―〇四五六一内線三八)

事務局日誌

7・13(水)平成六年度日博協頭影候補者申請書送付

7・29(金)旭川市板東徹市長あて道博協大会補助事業収支決算書の提出

8・19(金)北海道教育あて道博協大会補助事業実績報告書提出

8・22(土)アイヌ民族博物館より資料盗難の件通知有り

8・22(月)平成六年度道博協学芸員部会要項発送

8・31(水)道博協加盟館園に対しアイヌ関係資料盗難

多発の件注意喚起

8・31(水)第33回道博協大会道補助金確定

9・1(木)アイヌ資料盗難事件多発の件STV取材

9・28(水)アイヌ民俗文化財職員研修会後援申請承認

9・29・30(木)平成六年度道博協学芸員研修会、札幌市アークシティホテル・開拓記念館にて開催

10・4(火)北方民族文化シンポジウム後援申請承認

10・7(金)第34回道博協大会補助金交付申請書を道教

委あて提出

10・7(金)道博協の望ましいあり方に関する検討会札幌周辺役員に呼びかけ

10・9(土)平成六年度博物館活動交流推進会議に関し開拓記念館に共催承認

10・14(土)エヌ・ティ・データ通信K道支社協会加入

10・22(土)平成七年十月開催の昭和新生成五十周年国際火山ワークショップ実行委員会(壮瞥町)より参加の要請承認